土曜日

ナカノリエ

「マンションを買おうと思うんです。」
入社３年目の野山くんはそういった。
収入も安定しているし、別にそんな独身男性がマンションを買ったとしても何ら不思議はない。
ただ、なおは、なんと返していいかわからなかった。
あの不思議な散歩から、するすると親しくなって、仕事帰りに食事をしたりすることはなくても、週末デートらしいことはするようになっていた。
ただお互いの家に行くでもなし、なんというか、中学生か高校生のような時間が続いていた。
これって、つきあってるのかなぁ。
とはいえ、こんな話を持ちかける相手もいなかったし、人に話すようなことでもないような気がした。
ただ距離感が心地よいので、悪い気はしなかったし、むしろ幸せだった。

「それで、僕としては、なおさんにも一緒に決めていただきたいと思っているんです。」
珍しくキッパリとした様子だった。
そういっても、マンションを一緒に決めるって、私、お母さんじゃないし。
ますます、どう相槌を打っていいものかわからなかった。
「結婚して欲しいと思っているんです。」
うわー、なんだか、お花畑の中に放り込まれたような、照れくささ。
幸せでドキドキしてしまった。
「なおさん、僕と結婚してください」
どこまでも、まっすぐに、スルスルと心地よく、リードされる。

「あの、私たちつきあっていると思っていいのかな。」
「僕は女性とつきあったことがないので、わかりませんが、僕はなおさんと結婚したいと思っています」
真昼のレストランで向かい合わせになって、今日の野山くんは心地よくなおの心をトントン押してくる。
今にも「よろしくお願いします」と口から零れそうなのだけれど、この幸せいっぱい感にめまいがして、めまいがして、立ち上がりかけて、ガタンと椅子からひっくり返ってしまった。
残業続きで、寝不足がたたったのだ。

「なおちゃん、なおちゃん」
母の声だった。
「目を覚ましたのね、忙しかったんですって？そういう時は、近いんだからママのところに帰って来てくれたらいいのに。疲労ですって。あら、点滴ももう終わるわね、看護師さーん」
「やだ、ママ、ナースコール押してよ」
「あら、うっかり。だってママ健康だから病院のベッドになんてご縁がないんだもの～。」
大丈夫ですか、もう顔色も良くなりましたね、点滴外しましょう。
ゆっくり起き上がってくださいね。
看護師さんに促されて、廊下へと出る。

野山くんが長椅子から立ち上がった。
「大丈夫ですか？」
「ありがとう、なんだったんだろうって感じ。なんかよく寝ちゃった。」
「野山さんでしたっけ？ありがとうございました。本当、こんな調子ですけど、これからもよろしくお願いしますね。お茶でもご一緒したいところなんだけど、今日は息子たちが来るので、私はここで。」
「あ、ママ、ありがとう。お兄ちゃんたちによろしく。」
「じゃあね、なおちゃん」

ボーイフレンドと聞きつけたらグイグイ来そうなママが、帰って行った。
お兄ちゃんが帰って来るのだ。
なおには二つ上の兄がいて、大学からずっと一人暮らしで、絵に描いたようにお盆とお正月しか帰って来なかった。
それが、結婚して、お姉さんとよく実家に帰るようになった。
お姉さんと言っても、なおと同じ年なのだけれど、家族みんなが知らないまま、学生時代からずーっと付き合っていて、ここ1年程

で結婚したのだ。
どうやら彼女はママの料理を習いに来るようなのだけれど、なおにはそういう感覚がないので、よくわからない。
たかしの親にも会ったことはなかった。
かわりに、たかしはうちに来たがって、なおの母親に気に入られるのを喜んでいた。
父親は嫌がった様子はなかったけれど、お兄ちゃんがいるせいか、男同士だからなのか、なおの友達が来ているのと何も変わりはなかった。

「病院まで付き添ってくれてありがとう。」
「すいません、具合が悪そうだったんで、このまま帰すわけにも行かないと思って」
「ありがとう」
ここは、なおのかつての実家から一番近い病院だった。
そして、今日のデートの下北沢の病院でもあった。
いざという時に備えていたわけでもないのだけれど、なんとなく、なおの長財布に診察券が眠っていたのだ。

ママは、なおが眠っている間に、先生が呼んだらしい。
喘息だったなおは小さい頃によくかかっていて、先生は懐かしさ半分、電話したら、駆けつけてくれたらしい。
先生っぽいな、ママらしいな、多分、野山くんが気になったのだろう。

「土曜でよかったわね。さすがに総合病院じゃないから、自宅兼診療所と言っても、明日だったら、他へお願いするところだったわ」
と、なおが中学生の時に入った、受付の方が言った。
なおが中学生の時に、セーラー服姿のなおをみて、「懐かしいわ、その制服」と言ったのをよく覚えている。
地元の中学のはるか先輩で、お子さんが手を離れたので、校医さんの先生のところでお仕事に復帰したのだ。

会計を済ませて、病院を後にした。
野山くんのお腹がぎゅるっと鳴った。
そうだ、まだ料理も来ていなかったんだ。
二人はお昼ご飯を食べていなかった。
「ゴメンね、お昼どうしようか？」
「大丈夫です、でも、何か食べましょう。なおさんは食べられますか？」
「うん、寝たら元気になったから」

少し地元を紹介しよう、もう実家はここじゃないけど。
そう思いながら、高校生の頃、立ち寄ったカレー屋さんへ行くことにした。
まだあるかな？
高校生なんて、相当に前だ。
お店の入れ替わりがあっても不思議ではない。
でも、大丈夫、カレー屋さんはそのまま、そこで年を取っていた。
趣味の世界のお店で、木工細工がたくさんあった。
山の写真や鳥の写真が飾られている。
ホコリもかぶらず、気持ち良く掃除が行き届いている。
「お決まりですか？」
「いい？」
「じゃあ、僕はこれを」
「ダメ、二人とも、これで」
彼は少し面食らったようだった。

「お決まりですよ」
となおは言った。
「なじみのお店なんですか？」
「高校生の時に、時々来たの。」

「そうなんですか。大事なお店ですね。」
「そうじゃなくてね。」
「違うんですか？」
「そうじゃなくて、私、野山くんと結婚することに決めたの」
さっきまで、あんなにトントン押していたのは野山なのに、今度は野山が息を詰まらせている。
あの幸福をどんどん送り込んでしまおう。
「これからマンション観に行こうよ」
「これからですか？大丈夫なんですか？」
「もうよく寝て元気になったから大丈夫。善は急げだもの。」
「予約とかするもんじゃないですかね？」
「そうだった。じゃあ、住みたい街に行ってみようよ。」
「じゃあ、これから、なおさんのところに行きたい」

幸せの攻防が繰り広げられているところに、カレーが二つ運ばれて来た。
二人は漸く笑って、カレーを食べた。

下北沢は雑貨屋さんでいっぱいだ。
なおはお気に入りの雑貨屋さんに寄りたいと伝えた。
彼のグラスを買わなくちゃ。
お店に入って「これが野山くんのグラスにしよう」となおが言うと「サトルです。野山サトルです。」と野山くんがいった。
そしてグラスの隣にあった、刺繍の入ったコースターの中から、なおのＮとサトルのＳを選んだ。

「あっ！」とサトルが声を上げた。
「どうしたの？」
「なおさん、Ｎ.Ｎになりますね。」
「Ｎ.Ｎ？」
「ノヤマナオ」
「でも、会社では浅井のままがいいな。」
なおの社会人生活は、もうすぐ10年を迎えようとしている。
「冗談です、決まったのは結婚することだけで、どちらの姓にするか、どこに住むか、何も決まっていません」
「そうね。これから決めることがたくさんある。」
そういって、また幸せなお花畑に放り込まれて、めまいがしたので抱きついた。
「大丈夫ですか？」
「聞かないでよ」
なおは少し怒って笑った。

会計を済ませたら、電車に乗ってうちに帰ろう。
グラスを洗って、お揃いのコースターの上にアイスティーを乗せよう。
今日は小さな部屋でちょうどよい。

新築マンションをネット検索するのだろうか。
それとも式場を探すのだろうか。
親にはいつ会いに行くのだろうか。
そんなことよりも、もっとお互いを知り会わなくちゃ。
幸せな予感しか思い描けない土曜日の午後。